
Qualia and idleness

成露 草

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Qualia and idleness

【Nコード】

N5855Y

【作者名】

成露 草

【あらすじ】

私、緋乃籠目は、勇者・魔王・チートなどと呼ばれる人達が集まって出来た世界に君臨する四人の王の一人、観測者をしている。淫魔族の宰相（鬼畜眼鏡）に仕事を急かされたり、過保護な従者（ヤンデレ気味）に世話をされながら、それなりに幸せな生活を送っている。父親の子供問題（百人超え）や魔王の八つ当たり（世界崩壊の危機）、国民同士のいざこざ（世界大戦）などの内輪の問題から、異世界トリップ、逆異世界トリップなどの外交問題（一日一人は召喚されます）に対処しながら、ペットの獣人（たまに襲われます）

を癒しに頑張つて え？ 魔王が勇者として召喚された？ ああ・
・うん、ごめん。ちょっと問題が発生したからこれで失礼するけ
ど、気にせずゆっくりしていいからね。

プロローグ

【創造国書第一巻 第一章 著・観測者リズスガルドⅡカツツエ】
抜粋

余り知られていない事実だがどんな世界にも必ず、勇者や魔王、チートなどと呼ばれる者は存在する。

その者達の事を“メルティア世界を超越する者”と呼ぶ事にしよう。

メルティアの存在する理由は様々だが、どんな理由であろうとメルティアと世界の間には一つ共通点がある。

メルティアが世界にとって異端である、と言う事だ。

中には英雄、勇者などと世界に必要とされる者もいる。

しかしそれは必要な時に生まれることが出来た、ごく一部が得うる名だ。

大概の者は危険人物として末梢される。

だが簡単に殺されるようならばメルティアとは呼ばれない。

メルティア達は世界を敵に回しても生き残った。いや、正確には死ねなかった。

生き残り、生き残り、生き残り。

いつしか精神崩壊を起こすメルティアが現れ、世界を破壊し始めた頃。

メルティアの中でも更に異端である四人のメルティアが安寧に暮らす為の策を考えだした。

自分達を受け入れることの出来る世界がないならば、自分達で世界を創ればいいのだと。

その四人はメルティアの心が壊れることを防ぐ為に、新たに産まれ来るメルティアを幸せにする為に世界を創った。

そしてその四人は、聖帝・竜帝・魔王・観測者と呼ばれる王と成った。

【創造国書第八巻 第四章 著・観測者リズスガルドⅡカツツエ】

抜粋

コンクエストヴェールンス
『征服する世界』

これが向葵・第三期からのこの世界の名だ。

制圧的な名前だが、事実制圧的な行いをしているこの世界には似合いの名前だろう。

だがこの世界に反抗する者は誰一人としていない。

なぜなら、この真実に気付いているのはごくわずかな者達だけだからだ。

大部分の者達はこの世界の存在さえ知らない。知っている者達も神話のように考えているだろう。

気付かれないように征服しているのではない。

その力量の差から誰も気づくことが出来ないのだ。

違和感など一切なく、それが当然のことのように思えるほど自然に。

だからこそ気付いた者達は畏怖から『コンクエストヴェールンス』と呼び、ついにはこの名が正式名称と成ったのだ。

視点一 聖帝騎士の朝

早朝、隣人が飼っている鶏の鳴き声で、俺 オガタセイジロウ 緒方清二郎 は目が覚めた。昨日飲みすぎたせいで頭が痛い。鶏の甲高い声は大いに俺の頭痛に貢献した。

「くそつ・・・薬、貰ってくるか」

この世界の酒は、薬の耐性が強い奴でも酔えるように出来ている為、それ専用の解毒薬でなければ二日酔いを治すことはできない。他世界の酒と比べると厄介な酒だが、解毒薬さえ飲めば酔いを覚ますこともできることから、俺は好んで飲んでいた。そして毎回薬をもらいに行くのだが。

朝食を作るのも億劫だったので、城の食堂で食べれば良いかと

二日酔いの時は何時もこうだ 制服を着て部屋を出た。

朝日が眼に痛いほど輝く中、大通りはすでに人で賑わっていた。焼きたてのパンの匂いが漂ってきたと思えば、魚の生臭い匂いが鼻を突く。売り子の声は鶏の声ほどではないが俺の頭にダメージを与えた。朝市の客は、俺と同じ人間と昼型の獣人がほとんどだ。時々、エルフも眼の端に映る。

テレポーション
サウンドシュルジョン 移転で城まで行ってもいいが、なんとなくこの空気が好きで、途中防音魔法を自身に懸けはしたが、のんびりと登城した。

城は正方形の形をしていて、俺が必要としている薬と食堂があるのは西側に門がある観測者の領域だ。流石に、俺がいる聖帝の領域である南側の門からそこまで歩く気はないので移転で一気に飛んだ。他世界からこの世界に来た俺にとって、門番がいまいということは大いに俺を驚かせた。俺の故郷ではどの城だって、いや、金があれば貴族だって門番を置いていたからだ。

「だが、これはないだろう」

門番がいまいことは、この国に住んですでに5年経つ俺を驚かせることはなかったが、門が無くなっていたことには驚かされた。こ

この城に外壁はないので城に直接ある門が破壊されて中が丸見えになっていた。通路に敷かれた真紅の絨毯が、大理石の破片と土で汚れている。敵襲……などと言うことはあり得ないので、恐らくどこかの馬鹿が馬鹿をやったのだろう。俺はひとつため息を吐くとその惨状を横目に中に入った。この程度のことで一々騒いではいけないということはこの世界では常識だ。これが何時起こったことかは知らないが、遅くとも今日の午後までには元通りになっているだろう。中央階段を上がって少し行ったところに医務室がある。観測者はこの世界の他王よりも遥かに知識が深い。観測者は世界中の文化を記憶・管理することが仕事なので必然とそうなったのだ。よって、医療に関することはどの王の民など関係なく全て観測者の管轄となっている。

これを聞いたとき、門番有無以上の衝撃を受けたが、同じ城に集まって暮らしている所から、王同士の仲の良さが窺えるのでなんら問題はないのだろう。

「おはようございます」

医務室と書かれた看板が釣られた、細かい装飾が施された木製の扉を挨拶と共に開けた。ここの看護師は挨拶だけには厳しい。一度無言で扉を開けたことがあったが、治療が終わった後、一時間近く正座で説教をされた。

「あら、緒方さん。おはようございます。今日も二日酔いですか？」

ここの常任看護師であり、受付嬢のミアンナが俺を見てそう言った。俺が朝、ここに来る時は二日酔いの時しかないので、そう言いながらすでに解毒薬を出している。

「ああ、貰って行く」

薬を受け取ろうと手を伸ばすと、薬に手が触れる前にミアンナに手首を掴まれた。ミアンナはかなりの美少女だ。身長は俺の肩辺りまでしかなく、柔らかそうな栗色の髪がふんわりと彼女の顔を覆っている。大きな亜麻色の瞳で甘く見つめられては男ならどんなお願いでも聞いてしまうだろう。

そんな彼女がどこから取り出したのか、櫛と真紅のリボンを片手に持って目をギラギラさせながら俺に声を低くして言った。

「その前にその頭をなんとかさない？」

「・・・はい」

医務室の花、ミリアンナ。子供を八人も抱える母親である。一番上の息子に会ったことがあるが、どう見ても30過ぎのオッサンだった。どんな猛者であろうとも彼女からすれば皆子供。渾名は“姐さん”である。

ミリアンナにつけられそうになったリボンを何とか拒否し、俺は黒ゴムで背中の中ほどまである黒に近いこげ茶色の髪をひとつに束ねた。

観測者は医療に関することは全て無料としている。薬代も掛からない。だが、ここを利用した奴は大体これぐらいでは？ という勘で料金を払っていく。俺も払った。なぜ無料なのにそんなことをするかと言うと、それはここの恐ろしいポイント制が関わっている。

俺がまだ、この世界に来て3か月ほど経った頃、その悲劇は訪れた。俺が10回目の解毒薬を貰いにいった翌日、上司から医務室からのメッセージカードを受け取った。そこには「マンドラゴンの根・500グラム、幡千華の茎・1キロ、一週間以内」と書かれていた。意味が分からず上司に聞くと、なんでも、医務室には使用ポイントというものがあり、それがたまるとこのようにお使いを頼まれるようになっていいるらしい。当時の俺は、まあ、医療なんていう金のかかるものがお使い程度で済むなら軽いものだよな、とタカを括っていた。そして、書庫でそれがどこに生えている植物なのかを知らべ、このお使いの恐ろしさを知った。まず、これらの植物はこの世界に存在していなかった。どちらも異世界の物だ。しかも別々の。これは、まだ良い。探索^{サーチ}を使えば大まかな絞り込みは可能だからだ。問題はこれらの植物が群生していないことと上級魔獣の住処にしかな

いところだった。あの後俺は、正確な数は覚えていないが、少なくとも30回以上は超長距離移動^{トランスポ}を繰り返して、期限ぎりぎりにお使いを終えたのだった。

あのメッセージカードは発行されたら最後、拒否権はない。そのため、ポイントをとれない為の唯一の方法である、勘による代金支払いをするのだ。代金がいくらなのかミリアンナや医者達は絶対に教えてくれないし、代金が少ないとポイントに加算されてしまうので何時もそれなりの額を払うようにしている。あの後から俺は一度もメッセージカードを貰ったことはないで足りないという事はないのだろうが、いくら無駄に払っているのか地味に気になるところだ。

上司曰く、絶対に出来ることしか頼まれないらしいが（子供の場合、普通に市場でお使いだそうだ）、これを考案したのが観測者だと知り、観測者は絶対に敵に回してはいけないと俺は思った。

医務室と同じ階にある大食堂を観測者は一般にも使用可能としている。この料理は、ありとあらゆる世界の物が出される。安くて旨いと言うことで常に大盛況だ。料理の内容は一週間ごとに掃き掃除のようになっていて、好評だったものは町のレストランにレシピを売り渡したり、本を出して利益を出している。

俺は、10種類あるメニューの中から『パルパ鳥のサンドイッチ』を選んだ。昨日の昼に食べた『坦々麺』が旨かったので、また頼もうかとも思ったが、朝からは重すぎるのでやめた。

「セイ！ おはようさん」

俺がカウンターで料理が出てくるのを待っていると、同僚のクルド^{ドラクーン}シャルイードが声をかけてきた。

「ああ、おはよう」

クルドは竜の獣人、竜人^{ドラクーン}だ。金髪碧眼で甘いマスクを持っている

上に、竜人の特徴である温厚さと一途さから多くのファンがいる。夢見がちな女が見たら「王子様！」と叫ぶかもしれない。見た目が20代後半なのに、口調が少々オヤジ臭いが、実年齢は1000歳を軽く超えているらしいので仕方ないだろう。

「ん？ セイ、お前また二日酔いか？」

薬は水なしで飲めるものなので医務室を出て直ぐに飲んだが、鼻のいい竜人にはわずかに残る残り香で分かったらしい。からかうような声色なのに表情は爽やかな微笑にしか見えない。本人曰く、ニヒルに笑っているつもりらしい。クルドのおかげで美形にも出来ないことがあるのだと知った。

「ああ、飲みすぎた」

「たったあれっばっちで二日酔いたあ、お前は本当に酒に弱いな。ところで、何を注文したんだ？」

「クルドが強すぎるんだ。俺が弱いわけじゃない。パルパ鳥のサンドイッチだ」

俺が言い終わるのとはほぼ同時に料理が出てきた。出てきた『パルパ鳥のサンドイッチ』は固めのパンに俺の掌ほどもある肉の塊が大量の野菜と共に挟まれているものだった。それも2個。

「・・・ひとつ食べないか？」

「セイは胃も弱いんだな」

いくらなんでもこの量は食べられないとクルドにひとつ進めるとため息交じりにそう言い、ほんの3口でそれを食べきった。大口で食べているはずなのに優雅な食事風景に見えるのだから美形とはつくづく得な生き物だ。

その後、『パルパ鳥のサンドイッチ』を2個と『坦々麺』を3杯、『角煮定食』4セットを注文したクルドと共に朝食を済ませた。

朝食を食べ終わった後は、魔術を使えないクルドと一緒に移転させ、聖帝の領域にある俺たちの仕事場まで移動した。机の上には大

量の書類が山となつて乗っている。俺もクルドも騎士なんていう職業に就いているが、週に1回か2回、聖帝が起こす問題に駆け出される以外はほとんど書類仕事だ。

思わず現実逃避のように窓の向こうに目をやると、青い空の中を巨鳥やグリフィン、ドラゴンが飛んでいるのが見えた。

小鳥などと言う可愛らしいものが一切いないが、いつも通りの平和な光景に何とも言えない充足感を覚え、手を動かし始めた。

視点二 観測者部下の戦い 前篇

魔王の領域は酷く閑散としているように感じられた。空気も陛下の領域よりも数度低いように思う。それは魔王の領域が城の北側にあるということもそうだが、それ以上に、領域全体に広がっている魔王の魔力の影響だろう。我らが陛下の包み込むような温かさがあ
る魔力が恋しくなる。

こんな所に長居は無用と、テレポーション移転し、現在魔王がいる執務室に向かった。

魔王の執務室の扉は3メートル程のもので、色が黒い事と細工がないことを除けば、陛下の執務室の扉となんら変わったところは見られなかった。

中に、魔王とその宰相がいるのが魔力から分かる。2人も私の存在に気づいてはいるだろうが、特になにかする気配はない。取るに足らないことと思っ
ているのだろう。

私は呼吸音さえも大きく響く静寂の中、小さく深呼吸をしながら、左手に抱えたバスケットを確認する。赤いシルクのリボンが可愛いバスケットに汚
れはない。リボンの形も完璧だ。私は今度は大きく深呼吸すると、目の前の扉をノックする
ために右手を挙げた。

陛下の命を果たすために、いざ！ 魔王戦へ！

観測者様の部下の朝は早い。陛下に忠誠を誓った私、セルディン「シエル」リードの朝も勿論早い。起床時間は朝日が昇る1時間から2時間前だ。陛下の起床時間はその日の気分次第でお代りになるが、就寝時間は太陽が沈む頃と大体決まっている。だから陛下につ
つがなく執務をしていただくために、陛下が御起床になる頃には必要書類を完成させなければなら
ない。とは言っても前日に、翌日の必要書類は完成させてしまっているので、長期書類の方がメインだ

が。

陛下は半身の影響で眠欲に特化されており、1日に最低でも12時間はお休みになる。この世界では常識だが、王の方々は皆対になっていらつしやるらしい。聖帝は竜帝と、我らが陛下は魔王と半身なのだそうだ。そこで出てくるのが、特化と欠如。それは、各々の性格にも大きな影響を及ぼしている。それが良いのか悪いのか、私には判断がつかない。だが、はっきり言ってそれは大した問題ではない。なぜなら陛下は素晴らしい方だからだ！問題は身体的に表れる特化と欠如である。これは、半身の片方が三大欲求のどれかに特化すると反対はそれが欠如するというものだ。宰相閣下曰く、特化した方の半身に、欠如した方の半身の欲が流れて行ってしまっているのではないかとのことだ。

つまり、陛下が1日の半分もの時間を睡眠に奪われてしまっているのは全て、陛下の半身である魔王が原因であると言うことなのだ！魔王め！許すまじ！貴様の所為で私と陛下との接触時間が大幅に削られているのだ！唯でさえ、多忙な陛下を私の様な下っ端が拝見するなどままならないことだというのに！ああ、宰相閣下や従者殿が羨ましい！宰相閣下は仕事で、従者殿は私生活で陛下に付きつきり！それに対して私が陛下を拝見出来るのは、通路を移動する時の凜々しくもお美しいお姿と、庭でお昼寝をなさっている時の愛らしい寝が　ゴホンツゴホンツ！！

ああ、らしくもなく興奮してしまっただ。ですが、それほど私、いえ、私達は陛下を愛し、尊敬しているである。

そして、今日も今日とて、我らが陛下のために私が仕事に精を出していた時、なんと奇跡が起こったのだ。

正午少し前、私は区切りのよい所まで仕事が終わりと、食堂へと向かっていた。その時、なんと正面から陛下がこちらに向かって歩いてきているではないか！しかも従者殿を連れず、お一人である。あまりに珍しいことに驚きながらも、陛下を拝見出来た喜びに私の胸は震えた。私は緊張で震える手に力を込めながら、通路の端によ

り出来うる限り優雅に頭を下げた。陛下の足音は真紅の絨毯に吸い込まれまったく聞こえない。しかし、優しく香る金木犀の香りから、陛下が近づいてくるのが分かった。普段、陛下は私達が視界に入ると一言声を懸けてくださる。近くでお声を聞くことが出来るだろうかと期待に胸を振るわせていると、陛下の足が私の視界に映った。このように近くに陛下がいらっしやることは初めての経験だ。心臓の音が頭に響く。頭が爆発しそうだ！

そんな私の耳に陛下の涼やかな声が優しく響いた。

「あなた、セルディンさんだね。この後暇？」

「……は、はい！ とても暇です！」

一瞬陛下の声に聞き惚れ、返事が遅れてしまった！ しかも内容が変だ！ ああ、だがそれ以上に陛下が私の名前を知っていてくれたことが何ともいいがたいほどの喜びを私に与える。

私が羞恥と歓喜に、顔を真っ赤にしていると陛下は優しくおつしやった。

お願いしたいことがあるの、と

着いてきて、と言う陛下のお言葉に従い、後に続くと、着いたのは陛下の私室であった。陛下は、どうぞ、と一言言うと部屋に入っていく。私もそれに慌てて続いた。

扉の作りは私が使っているものと大差なかったが、部屋の中は当然ながら私のものとは比べものにならない。広さは私のものの3倍は確実にあるし、何より調度品の質が違った。だが、今の私にはどんな優美な調度品もかすんで見えた。

陛下は部屋の右側に置かれていた長椅子に腰かけると私を見た。

一瞬目が合ってしまった慌てて頭を下げる。

陛下の御気分を害してしまったのではないかと内心冷や冷やしなからも、この程度のことで謝罪しては陛下のことを狭量だと思っている、と感じられてしまうのではないかと考え頭を悩ませていると、

髪に優しく何かが触れた。

「ふふ、サラサラだね。気持ちがいい」

その声で、今私の髪に触れているのが陛下の手であると気付いた。考えなど頭から吹っ飛び、頭に感じる優しい感触と今まで嗅いだ事がないほど濃く香る香りに神経が集中する。

あまりの心地良さに緊張が解れ、うつとりとじだした頃、陛下は私の少々長い襟足を優しくすいた後、顔を包み込むように持ち、目が合うようにそっと持ちあげた。

流れるような動作に、陛下の美しい紅い瞳と漆黒の髪が目映つてようやく私は自身の状況を把握した。湯気が出ているのではないかと言うほど顔が熱い。

陛下はそんな私を見て、3回、瞬きをした後、私の頬を親指の腹で撫で、微笑みながら、可愛いとおっしゃった。

そのお言葉と笑みに目が潤む。ああ、我が人生に一片の悔い無し！私はあまりの感動に口元が緩んでいたらしい。そっと口に何か柔らかいものが押し込められた。

頭で考えるよりも先に体が、陛下から与えられた物だという判断を下し、咀嚼する。口に入れられた物はどうやらサンドイッチらしかった。瑞々しいトマトや柔らかい鶏肉の味が口に広がる。

「美味しい？」

口にはサンドイッチが入ったままなので、必死に首を上下させる。陛下が手ずから与えてくださる物が不味いなど、ありえない。それどころか、陛下の微笑みさえあればグゼル 灰汁の強い植物で、虫も食べない でもお腹が一杯になるまで食べられそうだ。

「なら、よかった。実はお願いって言うのはそれについてなの」「どういうことですか？」

出来ることならずっと味わっていたかったが、泣く泣くサンドイッチを飲み込み、陛下の言葉に答える。

「これをね、届けて欲しいのよ」

そう言つて陛下が両手を前に出すと、そこに赤いシルクのリボン

が可愛らしいランチボックスが現れた。蓋が開けられており、中に数種類のサンドイッチが見える。そこには私が頂いた物と同じものもあった。

「はい。私などで宜しければ喜んで承ります。どちらに届ければ宜しいですか？」

私が承諾の返事をするに陛下は、ありがとう、と態々お礼までおっしゃり届け先を私に告げたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5855y/>

Qualia and idleness

2011年11月20日03時28分発行